

Topics 幻のスマトラ鉄道

巨大な歴史の闇に光 評論家・江澤誠さん、執念の著書



江澤誠さん

第二次世界大戦下、日本軍は東南アジア各地を占領した。連合国軍の捕虜や現地住民を働かせ、多数を死に追いやった。タイとビルマ(現ミャンマー)国境を走っていた「泰緬鉄道」はその一つ。映画「戦場にかける橋」などで有名だ。しかし、インドネシア・スマトラ島に、現地住民たちの犠牲により造られた巨大鉄道があったことは、あまり知られていない。評論家の江澤誠さん(69)による『大東亜共栄圏と幻のスマトラ鉄道』(彩流社)は、巨大な歴史の闇に光を当てる労作だ。

副題は「玉音放送の日



スマトラ横断鉄道で使用されていた機関車(一部)が野原に放置されていた—スマトラ島・リパカインで江澤誠さん撮影

完成した第二の泰緬鉄道」。日本軍は戦時下、国内と朝鮮半島、中国大陸、タイ、ビルマからマレー半島、シンガポールを経てインドネシアに至る「大東亜縦貫鉄道」の構想を持っていた。「スマトラ横断鉄道」はそれにつらなるもので、スマトラ島中部のパカンバル

「死亡者数は少なくとも15万人」とした。歴史に黒く刻印されるべきことだが、日本側の資料でそれをたどるのは難しい。たとえば防衛研究所戦史室(現・防衛省防衛研究所戦史研究センター)が編さんした『戦史叢書』。全102巻、

「公刊戦史」とも呼ばれる戦史研究の基本文献だが、江澤さんが確認した限りの、スマトラ横断鉄道の記述は4カ所計30行に過ぎない。しかも、誤りがあると指摘する。一例として、叢書では鉄道の完成時期について「終戦直前の8月中旬」とあるが、実際は「8月15日、玉音放送の日」が正しいと指摘する。大日本帝国の事実上の敗戦の日に完成したというのは、「大東亜共栄圏」の虚妄性を表すのに十分」という指摘が鋭い。

江澤さんは同志社大卒後、横浜国立天大学院で博士号を得た(環境学)。

発問題についての著作を発表してきた。しかし歴史学は「素人」だ。「でも原発や原爆は環境問題に関わります。歴史に関心はありました」。特に東南アジア史にはもともと興味があった。戦時下、シンガポールなどで、華僑が日本軍によって虐殺された。江澤さんは2014年、現地での慰霊祭に参加。日本の占領時代について本格的に調べる気になり、その中で横断鉄道のことを知った。「当初、情報はほとんどありませんでした。これで形になるのかと思いましたね。オランダ語もインドネシア語もよく分からず、無謀だったかもしれませぬ」

「当分、情報はほとんどありませんでした。これで形になるのかと思いましたね。オランダ語もインドネシア語もよく分からず、無謀だったかもしれませぬ」

闇夜を手探りで歩くようなスタートだった。しかし焼却や散逸を免れた軍の陣中日誌や、日本政府が連合国軍に提出した捕虜の死亡者名簿、日本軍将兵・軍属による戦友会史などを入手した。さらに16年、合計半月近く現地調査を敢行。鉄道建設を知る古者や、ロームシャの遺族を探し出した。調査の途中、道ばたのベンチに座ったところ、隣に101歳の村人がいた。ロームシャの監視をしていた人で、悲惨な実態を聞くことができた。「偶然。運がよかった」と話すが、執念があればこそそれを引き寄せたのだろう。

日本軍と政府。国鉄、建設会社など横断鉄道に関わった組織は、この非人道的な事業に沈黙した。被害者であるインドネシアも、戦後の国造りに忙しかったことなどから鋭い責任追及をしなかった。そうしたことから、スマトラ横断鉄道は闇に埋もれようとしていた。江澤さんは今回、新たな研究分野を切り開いた。それでも「日本の資料はそれなりに言及できていると思います。ただオランダの資料にはさほど触れられなかった。またインドネシアは、文献がどの程度あるかも分かりません。やり残しです」。今後も調査、研究を進めたい。成果が楽しみだ。

【栗原俊雄】